

2017/11/29

東京外国語大学語学研究所定例研究会

ドロミテ・ラディン語における

小辞 *pa* の文法化：

コーパスを用いた通時的分析

土肥 篤

東京外国語大学 / Università degli Studi di Trento



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies



UNIVERSITÀ DEGLI STUDI
DI TRENTO

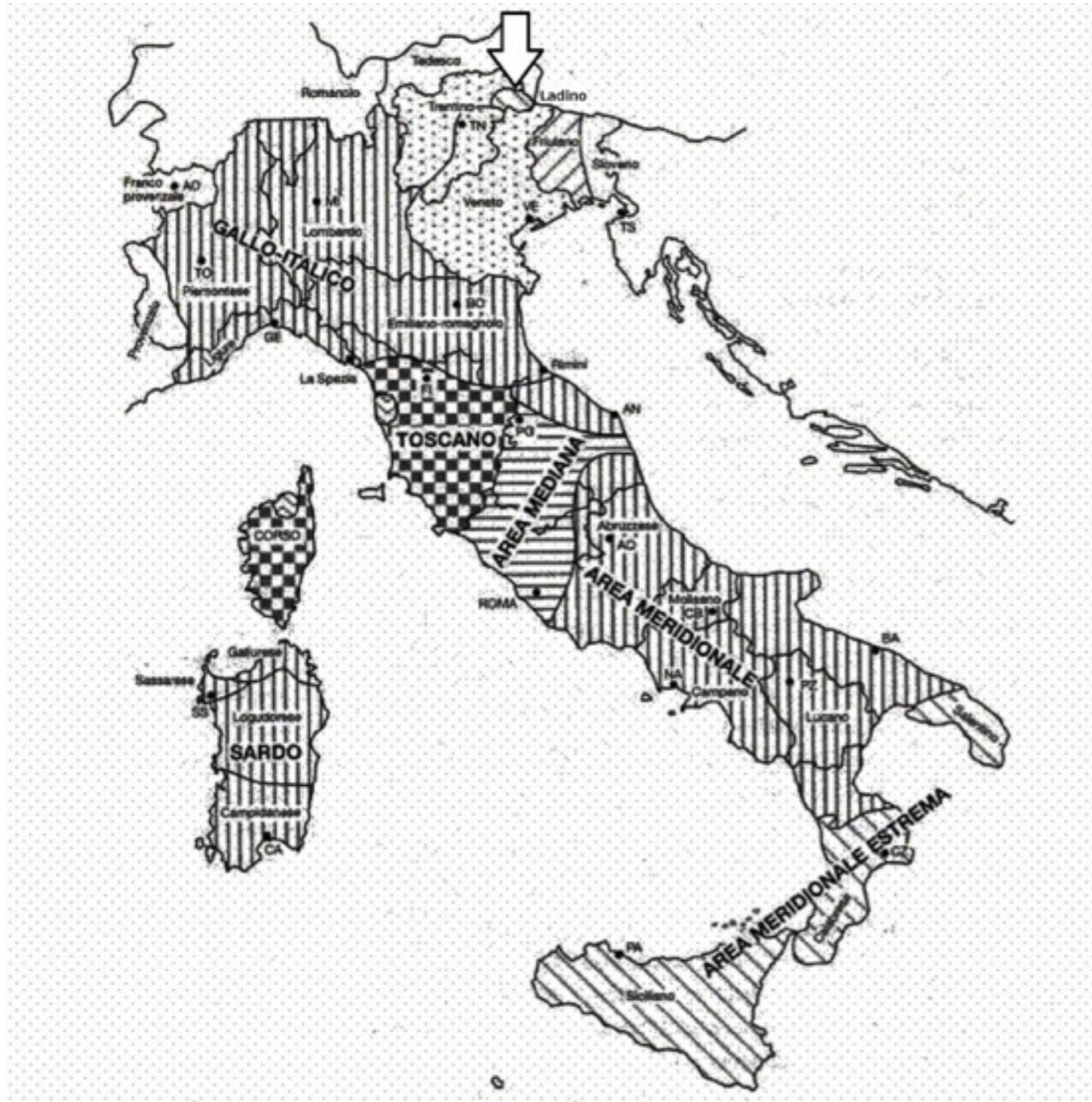
イントロダクション

- ドロミテ・ラディン語に現れる、疑問の小辞

(1) *Cie ie pa chësc?*

- (心態詞の) 文法化によって成立
 - 北イタリア諸方言に現れる心態詞
 - 方言による用法の差
 - ドイツ語 *denn* との類似
- 通時データから文法化の過程を探る

ドロミテ・ラディン語



イタリア北東部

- ヴェネト州
- トレンティーノ＝アルト・アディジェ州

話者数3～4万人

ドロミテ・ラディン語について

- 「レト・ロマンス諸語」：
 - a) ロマンシュ語
 - b) フリウリ語
 - c) ドロミテ・ラディン語

独立した語群として存在しているか？

→北イタリア諸方言の中で特別な地位を占めているか？

フィールドとしての北イタリア諸方言

- 北イタリアには、非常に均質な文法を持った多数の方言が存在している。
- 非常に均質であるので、一つの特性によってのみ異なる複数の文法を比較するのに最適の言語群である。
- 本発表が対象とする現象は、まさにこれが当てはまる。

“[...] the dialects spoken in this area are quite homogeneous from a lexical, morphological, and syntactic point of view. They represent an ideal ground for analyzing micro variations in syntax, as the grammatical systems compared do not differ very much from one another. Thus, this is as near as we can get to a controlled scientific experiment, in which grammatical systems that differ only on the basis of a single feature are compared.” (Poletto 2000: 3)

北イタリア諸方言とドロミテ・ラディン語

- 心態詞とその文法化という現象についてのケース・スタディー
- 「ドロミテ・ラディン語」 「ヴェネト方言」 「トレント方言」
全て便宜的な分類
- なぜドロミテ・ラディン語？
 - 本研究の対象とする小辞 *pa* についてドロミテ・ラディン語固有の特徴がある。

ドロミテ・ラディン語について

- ドロミテ・ラディン語の方言：

どの方言がドロミテ・ラディン語として分類されるべきか？

要因：

- a) 政治的問題・慣習の影響
- b) 言語特徴による分類の困難さ

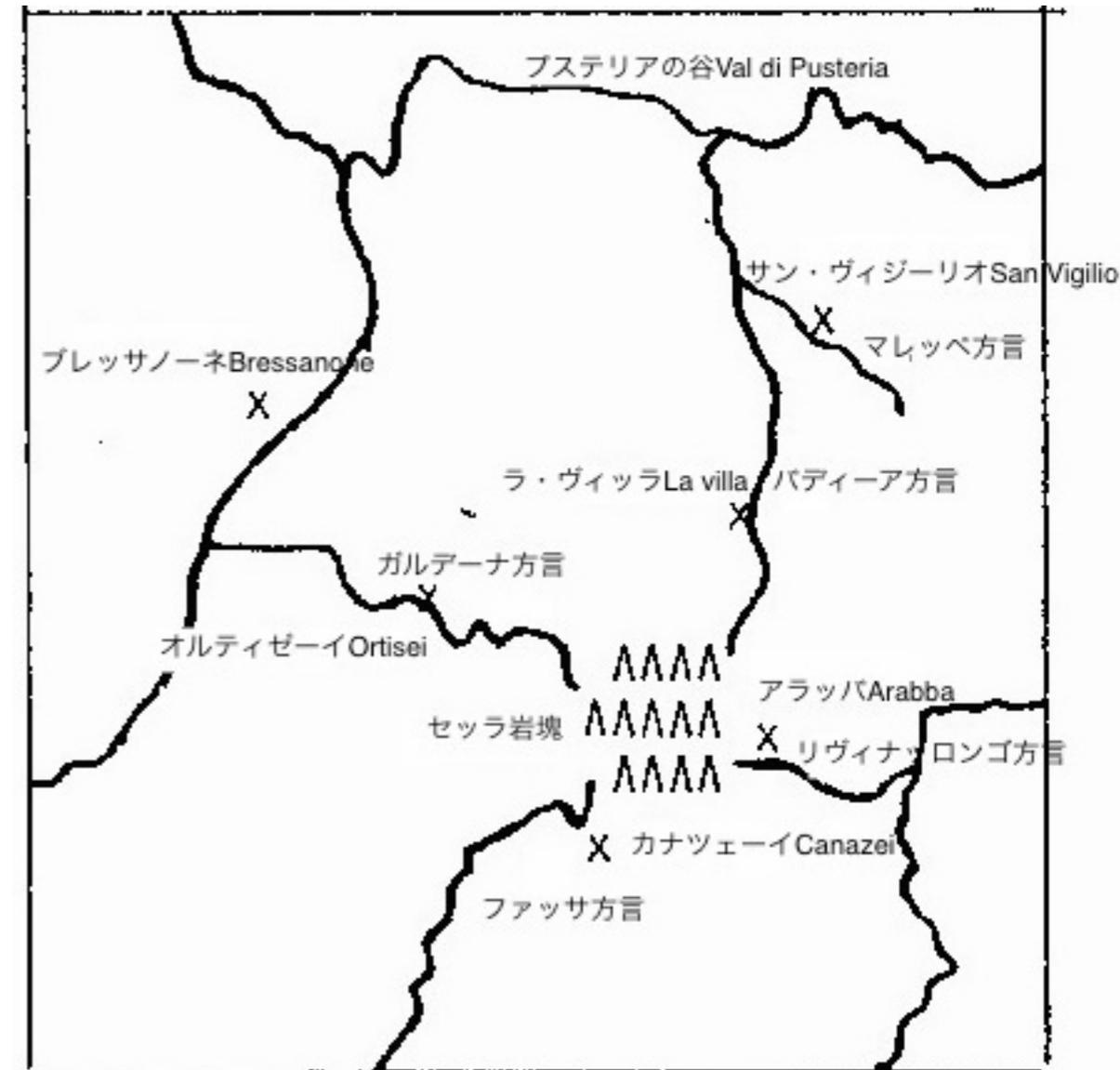
議論の対象になる方言：

- ノン方言 Noneso
- ソーレ方言 Solandro
- アンペッツォ方言 Ampezzano

ドロミテ・ラディン語について

- 同一テーマの先行研究 Hack (2011, 2014)
におけるドロミテ・ラディン語

- a) ガルデーナ方言 Gardenese
- b) バディーア方言 Badiotto
※マレッベ方言を含む
- c) ファッサ方言 Fassano
- d) リヴィナッロンゴ方言 Livinallese
- e) アンペッツォ方言 Ampezzano



心態詞

- 心態詞 (modal particle, sentential particle etc.) : 研究者による定義の不一致はあるものの、不変化の語のうち、**話し手の出来事に対する心的態度**を表すもの。

- es. ドイツ語 *denn*

(2a) Wo wohnst du?

(2b) Wo wohnst du *denn*?

cf. *denn* 「なぜなら」

北イタリア諸方言における心態詞

- イタリア北東部の諸方言（ヴェネト方言 Veneto、トレント方言 Trentino、ドロミテ・ラディン語）にも、心態詞が見られる：

a) *lu*

b) *ti*

c) *mo*

d) *pa (po)*

e) *pö*

f) *(pu)*

北イタリア諸方言における心態詞：*lu*

- ヴェネト方言に出現
- *Lu* (it. *lui*; 人称代名詞 3 人称単数男性主格)

(3a) *Lu el tase.*

- 心態詞の*lu*は（感嘆文に近い性質を持つ）平叙文に現れて、命題が話し手にとって予想外であることを表す：

(3b) *L'é frét, lu.*

北イタリア諸方言における心態詞：*ti*

- ヴェネト方言に出現
- *Ti* (it. *tu*; 人称代名詞 2 人称単数主格)

(4a) *Ti te credi de èssere furbo.*

- 心態詞の*ti*は疑問代名詞を伴う疑問文に現れて、話し手が答えを見つけられないこと(4b)、驚き・非難(4c)を表す：

(4b) *Quando sarali rivadi, ti?*

(4c) *Cossa sì drio magnar, ti?*

北イタリア諸方言における心態詞：*mo*

- イタリア北東部に広く出現
- *Mo* (it. *ma*; 逆接を表す接続詞)

(5a) *i l'á cherdé sö, mo al ne m'á nia respognü*

- 心態詞の*mo*は命令文と疑問文に現れるが、その用法は方言によって異なり、多岐にわたる。
- 本発表では、主なもののみを挙げる。

北イタリア諸方言における心態詞：*mo*

命令文に現れて、

- ・ 聞き手（を含む複数の人間）の利益になることを表す：

(5b) Magna, *mo* (che te deventa grant)!

- ・ すでに一度発話された命令を繰り返す：

(5c) Ciamime, *mo*!

疑問文に現れた場合、

- ・ 状況が話し手にとって好ましくない結果に終わる予想を表す：

(5d) Quando rivaràli, *mo*?

- ・ 不確実な内容であることを表す：

(5e) Ći pënsi *mo* de nos?

北イタリア諸方言における心態詞： *pa*

- イタリア北東部に広く出現するが、ドロミテ・ラディン語においてのみ、いくつかの点で他の心態詞と異なる特徴を持つ。
- 近隣方言（ヴェネト方言、トレント方言）では主に *po* の形で現れる。
- *Po* (it. *poi* 「後で」；時を表す副詞)

(6) *E po l'è andà via.*

- 近隣方言における心態詞の *pa* (*po*) は、疑問文に現れて、文中の位置により様々な意味を表す。

北イタリア諸方言における心態詞：*pa*

(7a) Quando eli rivadi?

- ・ 疑問詞の直後に現れて、話し手の想定していた最も可能性の高い答えが排除された後であることを表す：

(7b) Quando, *po*, eli rivadi?

- ・ 文末に現れて、この質問が既になされて答えが得られなかったことを表す：

(7c) Quando eli rivadi, *po*?

- ・ 文頭に現れて、出来事に対する驚きを表す：

(7d) *Po*, quando eli rivadi?

ドロミテ・ラディン語における *pa*

- ドロミテ・ラディン語は、*pa*の使用頻度が最も高い方言群。
(Hack 2011: 63)

- 最大の特徴は、疑問文のマーカ―としての用法を持つこと：

(1) *Cie ie pa chësc?*

- 主にガルデーナ方言およびバディーア方言に、似た形の小辞が複数現れる。
- 少なくとも*po*という形について*POS(T)*を語源とするが、その他の形については必ずしも明らかでない (Kramer 1993: 330)。
- 本発表では先行研究にならい、*po*と*pa*という形について同一の語として扱う。

ドロミテ・ラディン語における小辞群

- **Pö** : バディーア方言に出現

直前のコンテクストに反する内容の平叙文に現れる :

(8a) *Al é pö bun!*

また、同様に直前のコンテクストに照らして、話し手が言わなければならぬ内容の命令文に現れる :

(8b) *Fàl pö ch'al é na buna idea.*

- **Pu** : バディーア方言およびガルデーナ方言に出現

否定または肯定を強調する :

(9) *Pu no no!*

ドロミテ・ラディン語における *pa*

- 時を表す副詞として：

(10a) Amor ... se fesh *pa* na berta.

- また、未来形を代替して：

(10b) Al vëgn.

(10c) Al vëgn *pa*.

- 心態詞としては平叙文、命令文、疑問文に現れる。

ドロミテ・ラディン語における *pa*

- 平叙文においては、肯定あるいは否定の強調：

(11a) *Al é pa bun!*

(11b) *Al n'é pa bun!*

- 命令文においては、命令の強調：

(11c) *Fajé-l pa dessigÿ!*

※バディーア方言の命令文は、小辞なしでは言えない：

(11d) **Lîl!*

ドロミテ・ラディン語：疑問文に現れる *pa*

- ドロミテ・ラディン語の疑問文において、*pa*は**方言**と**疑問文のタイプ**によって用法に大きな差がある。
- **方言**：
 - 1) リヴィナツロンゴ方言・アンペッツォ方言
 - 2) ファッサ方言
 - 3) バディーア方言
 - 4) ガルデーナ方言
- **疑問文のタイプ**：
 - a) 疑問詞を伴うもの（Wh疑問文）
 - b) 疑問詞を伴わないもの（Yes/no疑問文）

リヴィナツロンゴ方言・アンペッツォ方言

- Wh疑問文とYes/no疑問文の双方において、*po*の形で現れて 心
態詞として機能する。すなわち、話し手が任意で付加し、新たな
ニュアンスを文に付け加える働きを持つ (Hack 2011)。
- Wh疑問文で、話し手の驚きや非難：
(12a) *Ma će voş=to pọ?*
(12b) *Će ášto ñọη?*
- Yes/no疑問文では、何らかの理由で与えられなかった答えを聞き
手に対して要求する場合に用いられる。ただし、*po*の使用は稀。
(13a) *Magnone pọ?*
(13b) *Magnone?*

ファッサ方言

- 主にpa（下位方言によってはpo）の形で現れ、Wh疑問文とYes/no疑問文で異なる振る舞いを見せる。
- Wh疑問文では、paの使用は任意である。
- 前出の方言群と異なるのは、paが心態詞として機能しない、すなわち新たな意味を文に付け加えないこと (Hack 2011)。

(14a) Che as=te *pa* fat?

(14b) Che as=te fat?

ファッサ方言

- Yes/no疑問文では、paは疑問の強調を表す (Chiocchetti 2001) :

(15a) Rùeste *pa* doman?

(15b) Rùeste doman?

- Yes/no疑問文においては、リヴィナッロンゴ方言・アンペッツォ方言と同じ用法 (任意で付加されて、意味を付け加える) で使われる。

バディーア方言

- Paの形で現れ、Wh疑問文とYes/no疑問文で異なる振る舞いを見せる。
- Wh疑問文では、paの**ない**文では疑問詞が強調される (Poletto 2000) :

(16a) Ulà t'a-i *pa* ody?

(16b) Ulà t'a-i ody?

- すなわち、無標の疑問文として解釈されるためにはpaが必須。
- ただし、同じ機能 (Focus marker) で値が逆になっただけ、とする分析もある (Poletto 2000)。

バディーア方言

- Yes/no疑問文では再び心態詞として機能し、話し手の驚きを表す (Hack 2011) :

(17a) *Và=les pa a Roma?*

(17b) *Và=les a Roma?*

- つまり、ここまで見てきた方言群と同様に、paは任意で付加されて意味を付け加える。
- ただしHack (2011) によれば、インフォーマントの中には(17a)を非文とするものもいた。

ガルデーナ方言

- Pa（歯擦音の後で'a）の形で現れ、Wh疑問文とYes/no疑問文で異なる振る舞いを見せる。
- バディーア方言と同様に、Wh疑問文ではpaのない文で疑問詞が強調される (Poletto 2000) :

(18a) Can compr=i pa n liber?

(18b) Can compr=i n liber?

- 無標の疑問文として解釈されるためにはpaが必須。

ガルデーナ方言

- Yes/no疑問文では、疑問文として解釈されるためにpaが必須である (Hack 2011) :

(19a) Vën *pa* ence Tone?

(19b) *Vën ence Tone?

- Wh疑問文においてはまだフォーカスのマーカであるという立場をとっても、疑問文のマーカとして用いられていると言える。

ドロミテ・ラディン語における小辞 *pa* :
 各方言の疑問文における用法まとめ

	アンペッツォ/ リヴィナツロンゴ	ファッサ	バディーア	ガルデーナ
Wh	意味の付加	任意 意味の 付加なし	無標の解釈に 必須	無標の解釈に 必須
Yes/ no	意味の付加	意味の付加	意味の付加	必須

小まとめ1：心態詞の中の *pa*

- 北東イタリア諸方言（ドロミテ・ラディン語、ヴェネト方言、トレント方言）には、様々な種類の心態詞が現れる。
- これらのうち、*pa* (*po*) はドロミテ・ラディン語の一部の方言において、もはや心態詞とは言えず、さらに（おそらく）語源である *POS(T)* ともかけ離れた、疑問文のマーカ―としての用法を持っている。
- この現象は文法化によって説明できる。
- 心態詞の文法化における一般的モデルの延長を示唆している。

(Hack 2011, 2014)

心態詞の文法化

- 心態詞に共通の特徴の一つとして、文法化 grammaticalization によって成立することが挙げられる (Bayer & Obenauer 2011: 451)。
- Abraham (1991: 337-338) によれば、文法化現象の一般的特徴のうち、心態詞に付随する要素は以下の通り：
 - a) 語彙的なものから文法的なものへの変化
 - b) 意味的複雑性の喪失
 - c) 語用論的価値の獲得
 - d) 統語的自由の喪失
 - e) 文法上の制約
 - f) 音声の喪失

Pa の文法化

- 疑問文のマーカーを含むpaの現在の用法は文法化によって成立したと仮定して当てはめてみると、
 - a) 語彙的なものから文法的なものへの変化
(一部の用法で) 接辞への変化、疑問文のマーカーへの変化
 - b) 意味的複雑性の喪失
語彙的な意味「後で」の喪失
 - c) 語用論的価値の獲得
モーダルな用法の獲得、のちに喪失

Pa の文法化

d) 統語的自由の喪失

ドロミテ・ラディン語においてはpaが現れることのできる位置は定動詞（と接語形主語の複合形）の直後、あるいはWh疑問文の直後のみ。

e) 文法上の制約

上記に加えて、pa自体が平叙文および命令文にも現れるのに対し、純粋な文法マーカースとしてのpaは疑問文にしか現れない。

f) 音声の喪失

純粋な文法マーカースと化しているガルデーナ方言においてのみ、縮約（歯擦音の後の'a）が起こる。

Pa の文法化

- つまり、小辞paは文法化によって成立した要素である。
- その順序は概略、時を表す副詞→心態詞→疑問文のマーカ―であると思われる。
- より具体的な文法化プロセスを明らかにしたい。
- Hack (2011, 2014)によれば、paはドイツ語の心態詞dennと同じプロセスを経ていると説明できる。

Denn の文法化

- *Denn* (< ohg. *thanne* “then”)

1) 空間上の位置関係「そこから」から時間的なもの「それから」へ

2) 対応する論理関係「だから」へ

3) 発話内行為のレベルにおける機能（以前の発話への言及）へ

(Wegener 2002: 386)

- 心態詞の文法化における一般モデル

Localistic > Temporal > Logical > Illocutive /

Discourse functional

(Abraham 1991: 373)

Denn の文法化：バイエルン語 *-n*

- バイエルン語のデータから、このモデルをさらに延長することができる。
- バイエルン語において *denn* に（語彙上）対応する小辞 *-n* は疑問文に現れる。
- *-n* の用いられた疑問文(20a)が無標の疑問文であるのに対し、用いられない文は無標の疑問文としては非文(20b)となり、疑問詞が強調されている場合のみ文法的(20c)。
- すなわち、無標の疑問文として解釈されるために *-n* が必須。

(20a) *Wos hosd'n gsogd?*

(20b) **Wos hosd gsogd?*

(20c) *WOS hosd gsogd?*

Denn の文法化：バイエルン語 *-n*

- Yes/no疑問文においては、*-n*が任意で付加されて意味を付け加える。

(21a) Homna-*n* dāi aa a Haus?

(21b) Hom dāi aa a Haus?

- この用法の存在は、心態詞の文法化モデルの延長を示唆している：

LOCALISTIC > TEMPORAL > LOGICAL > ILLOCUTIVE/
DISCOURSE FUNCTIONAL > **WH-QUESTION MARKER**

Pa と *denn*

- Hack (2011)が指摘する二つの語の類似点は以下の通り。

1) 語源

Denn < *Thanne*

Pa < *POST*

どちらも後置性を表す副詞。

2) 心態詞としての意味

疑問文の強調。

Pa と *denn*

3) 現れる文タイプ

どちらも疑問文に現れる要素。

ただし（心態詞の）*denn*が疑問文にしか現れないのに対して、*pa*は他のタイプの文にも現れる。

4) 縮約

'a（ガルデーナ方言）

'n（バイエルン語）

5) 義務性

どちらも（方言によって）疑問文の無標の解釈のために必須の要素。

Pa と *denn*

- 二つの小辞が異なる点は、paがガルデーナ方言においてWh疑問文だけでなくYes/no疑問文でも必須の要素である点。
- これらの観察から、先行研究 (Hack 2011, 2014) は以下の2点を提案する。
 - a) 文法化モデルはさらなる延長ができる。
 - b) ドロミテ・ラディン語の各方言において、小辞paはこの文法化プロセスの異なる段階にある。

小ままとめ2：paの文法化

Localistic > Temporal > Logical >

Illocutive /

リヴィナツロンゴ方言
アンペッツォ方言

Discourse functional >

ファッサ方言

Wh-question marker > **General question marker**

バディーア方言
(バイエルン語 -n)

ガルデーナ方言

先行研究の問題点

- 先行研究は主に *ASIt* (<http://asit.maldura.unipd.it/>) を利用し、共時データに基づいた分析である。
←データ収集の困難さ
- ドロミテ・ラディン語の小辞paについて、一定の量を備えた通時データを分析することが必要。
- 近年になって公開されたオンラインコーパス CLL (<http://vll.ladintal.it/>)

コーパスを用いた分析：仮説

a) Paの文法化がモーダルな価値の喪失と義務性の獲得という方向へ向かっているのであれば、小辞は時間の経過と共に無標のコンテキストに現れるようになり、また使用される頻度が上がっていくはず。

b) ドロミテ・ラディン語の各方言がただ一つの文法化プロセスに従ってそれぞれ別の段階にいるのであれば、より文法化の進んだ方言における過去の状況は前の段階に留まっている方言における現在の状況に似ているはず。

→各時代と各方言を対象に、paの現れる頻度とコンテキストの比較

コーパスを用いた分析：結論

a) Paは傾向として使用頻度が上がり、無標の文脈に現れるようになる。ただし方言によって例外はある。
→少なくとも方言によって、先行研究の想定するようなpaの文法化は存在する。

b) 文法化のプロセスは方言により大きく異なり、複数の時代と方言を比べても似た状況は見られない。
→ドロミテ・ラディン語における小辞paの文法化はただ一つの道筋に沿って起こったのではなく、それぞれの方言で異なる過程を想定する必要がある。

コーパスについて

- Corpus dl ladin leterar <http://vl.ladintal.it/>
- ドロミテ・ラディン語の全ての方言から590.610語を収録した書き言葉コーパス



[chier tl corpus de tesć ladins](#) :: [descrizion dl projet](#) :: [storia y plan de laour](#) :: [credits](#)

対象テキスト

- **散文**および**詩**のテキストに限定。
- 年代：**1800-1999**
三つの期間に分割 (1800-1899、1900-1949、1950-1999)
- 対象とする方言：
 - a) ガルデーナ方言：**331**テキスト
 - b) バディーア方言：**321** テキスト
※バディーア方言にはさらに下位方言があるが、今回の調査では考慮していない。
 - c) ファッサ方言：**278**テキスト
※ここでも下位方言の差は考慮しない。

調査

- 調査の対象とした文は、主語の倒置を伴うWh疑問文とYes/no疑問文。
- 調査においては、全ての疑問文をコーパスから抽出し、paを伴うものの頻度を方言・期間ごとに調べた。
- また、**無標の疑問文**（純粹に情報を求めるための文）と**有標の疑問文**（話し手がなんらかの心的態度を表明している文）に分け、paの出現との関連について検討した。
※通時データに対する有標・無標の判断の困難さ

対象となる疑問文

	1800-1899	1900-1949	1950-1999
ガルデーナ	62文	72文	147文
バディーア	296文	52文	212文
ファッサ	124文	81文	528文

ガルデーナ方言：Wh疑問文

- 出現頻度は、1800年代にはすでに高い（70%）。
- 頻度はさらに上昇する傾向にあり、1900年代後半には95%に到達する。

- Wh疑問文においては、1800年代にはすでに**無標のコンテクスト**にpaが出現している文が見られる：

(22a) Tan d'ani ala *pa*?

- しかし同じく**無標のコンテクスト**と思われる場所で、paのないものも出現する：

(22b) Bon di, bera Jan, co vala?

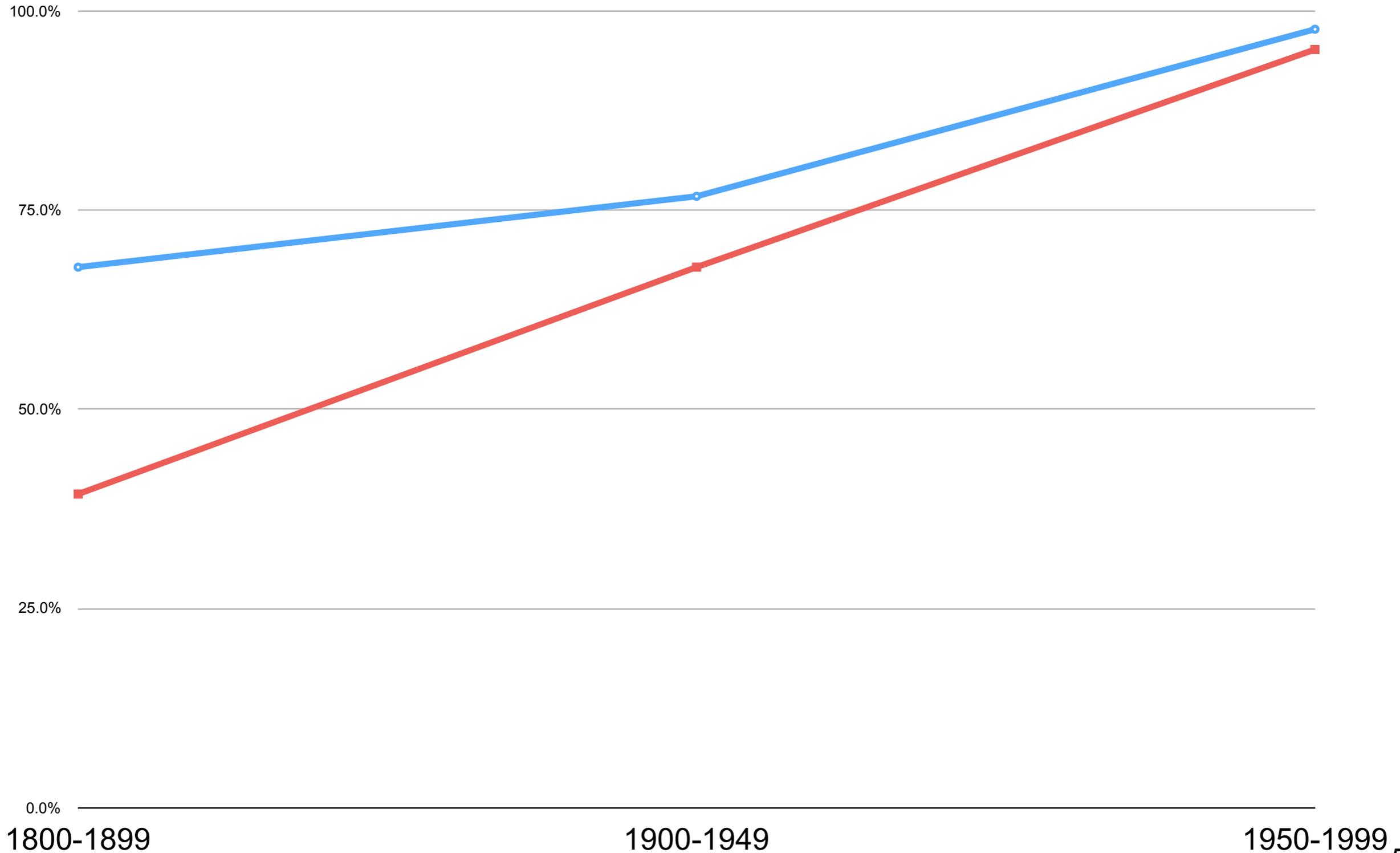
ガルデーナ方言：Yes/no疑問文

- Yes/no疑問文においては、1800年代から1900年代全てにかけて出現頻度の急速な高まりが見られる (30%→95%)。
- 1900年代後半においては、現代の用法とほぼ変わらない (**無標**・**有標**に関わらず、疑問文のマーカーとして機能)。
- 1800年代においては、**有標の疑問文**に現れている：
(23a) *Dijëde, ëis pa medejines?*
(23b) *Ues mëter pën dij un al auter, che chisc rejona de maië?*

ガルデーナ方言

○ Wh疑問文

□ Yes/no疑問文



バディーア方言：Wh疑問文

- Paの出現する頻度は高くなっていく。ただし、ガルデーナ方言と比べると、常に少し低い。
- 1800年代にはpaの存在がコンテクストを**有標**にしていると思われるのに対して、1900年代後半には**無標**のコンテクストに現れる。

(24a) Mi Dî, ci él *pa* chësc?

(24b) Da olá sëise *pa* os?

バディーア方言：Yes/no疑問文

- 1800年代には数こそ多くないものの、paの現れる疑問文が見られる。
- 現れる場合には、**有標**のコンテクスト。

(25a) ne podesseste *pa* bëre ega canche t' as sèi?

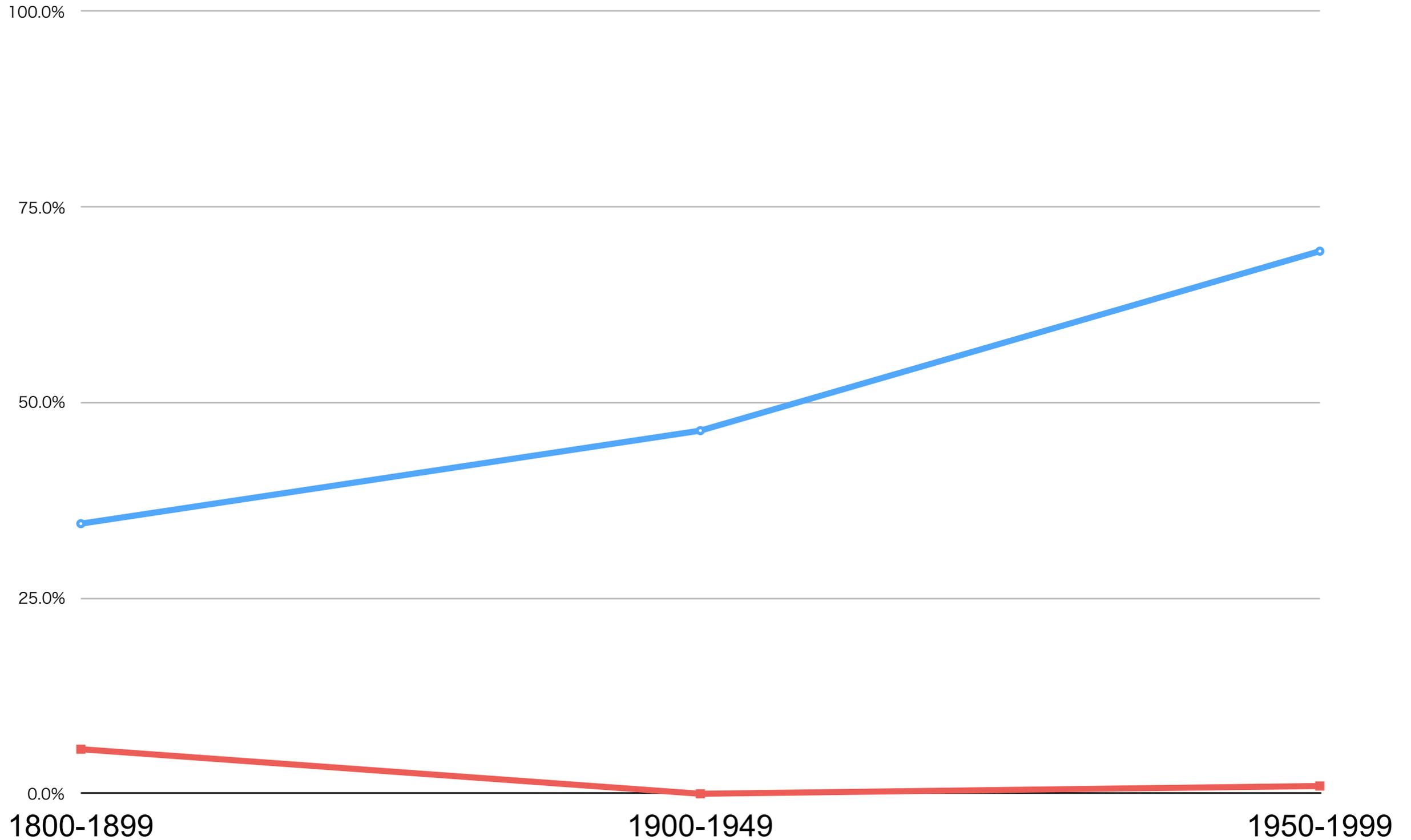
(25b) Oste l' ascolté?

- バディーア方言におけるYes/no疑問文では、1900年以降ほぼpaの現れる例が見られない。

バディーア方言

○ Wh疑問文

□ Yes/no疑問文



ファッサ方言：Wh疑問文

- ファッサ方言のWh疑問文においては、1800年から1999年まで出現する頻度が大きく変わらない（50-65%）。
- 少なくとも現在における用法が特殊（14a-b）のため、この方言におけるpaの意味について論じるのは難しい。
- 1800年代においては**無標**のコンテクストには現れていなかったと思われるのに対し、近年の例では**無標**の疑問文に現れている：

(26a) Che èste inom?

(26b) co v`ala pa?

ファッサ方言：Yes/no疑問文

- Yes/no疑問文におけるpaの使用頻度は全ての年代を通じて高くないものの、バディーア方言と異なり、近年においても例が見られる。
- 用いられる場合には、一貫して**有標**のコンテクストに現れる：

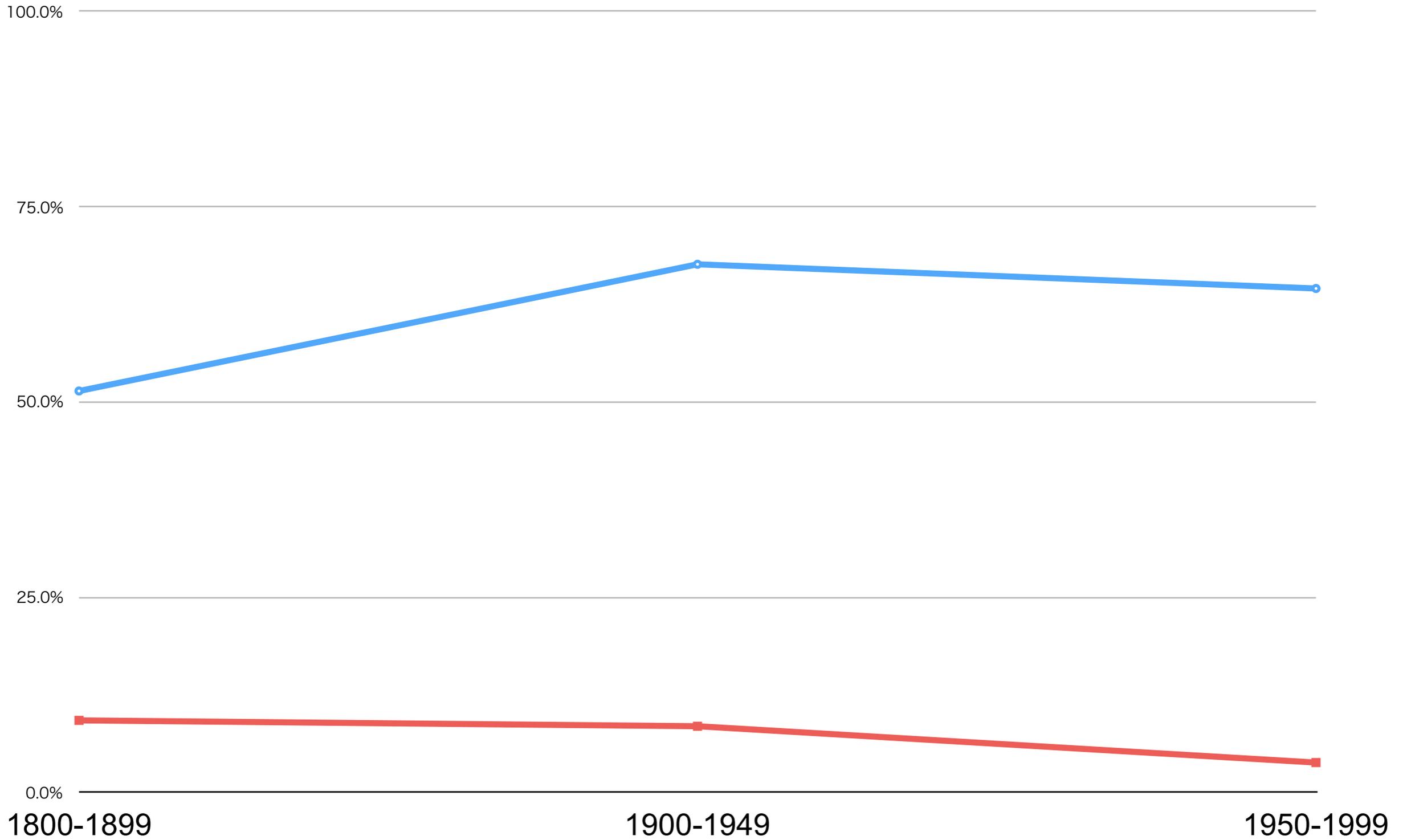
(27a) Ge aede *pa* lingrazià eh?

(27b) Ma élo *po* vera?

ファッサ方言

○ Wh疑問文

□ Yes/no疑問文



まとめ

ガルデーナ方言

- Wh疑問文とYes/no疑問文の双方において、小辞の（モーダルな）**意味の喪失と義務性の獲得がどちらも起こった**と思われる。

バディーア方言

- Wh疑問文においては**意味の喪失と義務性の獲得**が起こっている。
- Wh疑問文においてはガルデーナ方言を後追いしている。
- Yes/no疑問文では意味の喪失が起こることなく、むしろ**小辞の使用が排除**されている。

まとめ

ファッサ方言

- Wh疑問文においては、**意味の喪失が義務性の獲得を伴わない**。
- Yes/no疑問文ではバディーア方言を後追いする形で、**意味を喪失することなく小辞が排除される傾向**にある。

		ファッサ	バディーア	ガルデーナ
Wh	意味の喪失	✓	✓	✓
	義務性の獲得	-	✓	✓
Yes/no	意味の喪失	-	-	✓
	義務性の獲得	- (排除)	- (排除)	✓

結論

ドロミテ・ラディン語ガルデーナ方言・バディーア方言・ファッサ方言の疑問文において、

- Wh疑問文では小辞paが心態詞から無標の疑問文のマーカーに変化する文法化の傾向が見られる。
- ただし、この傾向はファッサ方言には見られない。
- Yes/no疑問文ではWh疑問文同様に疑問文のマーカーになる変化と、反対に排除される二つの進化が見られる。
- 各方言が唯一の文法化モデルにおいてそれぞれ異なる段階にいるというわけではない。